

第3回 武蔵野市生涯学習計画策定委員会 議事録

日時 令和元年6月20日(木) 17時30分～19時30分
会場 西久保コミュニティセンター 大会議室
出席者 板垣文彦委員、宇佐見義尚委員◎、北村淳子委員、助友裕子委員、白田紀子委員、
花田吉隆委員、牧野篤委員○、松村勝人委員、斉藤愛嗣委員、福島文昭委員
◎委員長、○副委員長

資料 資料1 計画の構成について
資料2 武蔵野市生涯学習計画 骨子案

次第

1 計画の構成について

事務局より、資料1を用いて計画の構成について説明を行った。

2 計画の骨子案について(第1章～第3章)

事務局より、資料2を用いて計画第1章から第3章の骨子について説明を行った。

委員長 事務局からの説明についてご意見をいただきたい。

委員 網羅的にまとまっている。ただ、施策体系はまとまりすぎているのではないか。切り口がシンプルになったために重点化する部分が分かりにくくなっている。

社会の変化によって生じる新たなニーズに応じた学びを提供していくことが切り口としてあってしかるべきだと思う。ニーズのひとつには高齢者向けの機会提供が挙げられ、資料2で課題として取り上げられているが、施策体系では見出しとして示されていないことが気になる。

もうひとつ、資料2で単身世帯が取り上げられ、また独居高齢者についても触れられているが、その実態に照らしてライフステージ・ライフスタイルに応じた学びという考え方でよいのか。生涯学習には社会福祉的な要素もあると思う。経済状況を配慮した学びのアクセスについても同様に、取り上げた方がよいのではないか。

社会的なニーズに応じた社会福祉的な施策を取り上げた方がよいのではないか。

委員長 自分も同感である。資料2の2頁の「計画策定の背景・目的」には、「本市を取り巻く環境も変化しています」と書かれているので、その変化の実相を出来るだけ具体的に洗い出す必要があると思う。

委員 高齢者の問題は大事だと思うので項目として立てた方がよい。福祉分野で取り組んでいる事業も取り入れた方がよいと思う。

また、市民が読んで分かりやすい計画にするためには、スポーツや趣味、レクリエーションが生涯学習として示されるべきだろう。作成中の第六期長期計画には生涯学習があまり取り上げられていない。それは市民に生涯学習の考え方や大切さが伝わっていないからではないか。市民に対して生涯学習の魅力が広く伝わるような文章として書かれるとよいと思う。

委員

人生100年時代に関連すると、高齢者だけでなく高齢者予備軍も、さらには将来高齢者になる子どもたちも含めて考えるべきだろう。人生が長くなる中で学びながら生きていくというメッセージを伝えていく必要があると思う。それに関して質問したいのだが、キャッチフレーズは現行計画のものを引き続き使うのか。

事務局

変更してよいと考えている。

委員

そうであれば武蔵野市の目指す方向性が、誰もが分かるメッセージで示されるべきだと思う。

また、現行計画に関して基準を明確にした評価を行うべきだと思う。現状がレビューされているが、その評価を具体的に示してもらいたい。また、新しい計画では、基本理念や方針にアンケート調査を活用した指標と数値目標を立てる方がよいのではないか。マスタープランとはいえ、指標があると「使えるマスタープラン」になると思う。

委員長

キーワードがいくつか提示されていたと思うので、これから議論していきたい。現行計画の評価についても事務局で検討いただきたい。

委員

資料2の2頁の生涯学習の定義では個人と社会の豊かさが並置されているが、社会貢献することで個人の豊かさを感じることもあるので、その点も評価できるとよいと思う。

3頁で本計画がマスタープランと書かれているので、計画では具体的な施策は示すことができないということなのだろう。計画の内容に照らして具体的な内容を生み出していくためにも、その糸口を計画に含めておけるとよいと思う。

委員長

計画はマスタープランではあるが、本委員会では具体的な内容についても積極的に議論してもよいとは思っている。

委員

先ほどの高齢者についての意見はもともとだと思うが、高齢者福祉という行政分野があり、生涯学習的な事業も行っている。それを踏まえると、高齢者向けの事業は、施策の方向性3-3「市の各種事業の「生涯学習化」」に該当するのではないかと思う。ただ、その説明書きはそのような内容にはなっていないので、記述の幅を広げてもらえればと思う。

資料2の5頁の図表「市が提供する主な学びの機会」はもっと充実させてもよいのではないか。市長部局で行っている事業も枠があるので、その部分を強調・充実させると、先ほどから言及されている対象（高齢者）に既に多くの機会提供をしていることが分かると思う。

- 委員長 資料2では「独居老人」という言葉が使われているが、イメージがよくないので、新しい言葉を検討したいと考えている。
- 委員 議論してみたいのは、生涯学習の定義に用いられている「豊か」という言葉の意味である。いずれ時間を取りたいと考えている。
- 委員 武蔵野市では「独居高齢者」と用いているので、次回から改める。
- 委員 「独居」という言葉には社会に出てこないというニュアンスがあるのだと思う。そのような人たちを外に引き出す必要があるという課題認識が言葉づかいに含まれているのかもしれない。
- 委員 「豊かさ」のほか、「武蔵野市らしさ」も考えるべきだ。行政の委員会ではよく議論されるが、定義されていない。生涯学習における「武蔵野市らしさ」を考えたい。
- 副委員長 生涯学習の定義において個人にフォーカスしたいという考え方が示されたが、社会と個人を媒介するものが必要だと考えている。生涯を通じて学んでいく力のようなものだ。
- 「武蔵野市らしさ」とも関わるが、このまちに来て感じるのは自分の生活を大事にしている人が多そうということだ。そして、自分の生活を大事にすることからまちのあり方を考えていくというロジックがあるように感じている。つまり、自分の望む生活を成立させるためにまちがどうあって欲しいという考え方である。
- 生涯学習についても、学んでいく中で自分の生活がよくなり、結果としてまち全体がよくなるというプロセスもあると思う。それが個人と社会を媒介する考え方であり、その媒介が生涯を通じて学んでいく力である。
- たとえば人生100年時代においては子どもも対象にするべきだという意見があったが、次世代が幸せに過ごすために必要なことを考えると、子どもたちが自分の人生を主体的に築いていってほしいという結論に至ると思う。ここで社会と個人が学ぶ力で媒介されていることが分かると思う。そのような視点から計画全体を見直してみたい。
- 最初の話に戻ると、武蔵野市らしさは自分の生活を大切にすることから、まちがよくなるという考え方もあるのではないかと思う。だから、基本理念についても学び続ける力を育むということと考えることができないだろうか。行政サービスを要求するのではなく、自分たちの生活をよくするという考え方に立ち、そのために学び続けるということが大事なのではないか。
- 委員 学び続ける力という言葉はよいと思う。あらゆる世代に対して、経済状況や能力に関わることなので、よいテーマだと思う。
- 委員長 哲学者谷川徹三に、『90にして惑う』という対談集（昭和61年）があるが、そこでのテーマは、生涯学び続けることの意味を突き止め、「学ぶことは、惑うこと」としたのは良い得て妙な気がする。

- 委員 これまでの人生は、学生の頃は勉強に勤しみ、就職すると仕事にまい進する。そして退職するとまもなく死んでしまうというものだった。しかし、現在は異なってきているので、これまでの固定的な人生観で生涯学習を考えるべきではないのだと思う。
- 委員 また、個人が情報を発信できることも大きな変化である。自ら情報を発信し、また収集しながら色々な活動をするようになってきている。そのような状態が豊かさのひとつになるのではないか。
- 委員 資料2の13頁の「F生涯学習と地域活動が結びついていない」における考え方を再考してはどうか。この部分は分かりにくく、やや矛盾もあるように感じるのだが、個人と社会を別のものとして捉えているからだろう。個人のために学ぶことと社会の課題は別物になっている。ただ、先ほどの意見を踏まえると、個々人の学びが、当人にとっては個人的な目的のかぎりかもしれないが、結果的には地域のためになっているということもあるだろう。そのような認識で文章を整理しなおしてはどうか。生涯学習の定義についても同様だと思う。ロジックをもっと練った方がよいと思う。
- 委員長 「全体に即して個に生きる」という考え方がある。全体と個人との関係を考えるうえで参考になるのではないか。
- 委員 計画を考える上では、学習機会を提供する立場で考えることになる。一方で、コミュニティ構想では地域コミュニティや目的別コミュニティ、電子コミュニティが位置づけられている。そのようなコミュニティによる活動も生涯学習を行っている場合もあるだろう。実際の活動を踏まえながら、もっと広い視野で生涯学習を捉えた方がよいのではないか。
- 委員 現在は個人と社会だけでなく、たとえば仲間づくりのような中間的なものもあるのではないか。
- 副委員長 武蔵野市の計画なので、行政的な施策として考える必要はあると思う。その枠組みの中で個人と社会の関係があると思う。先ほどの中間的なものは確かにその通りだと思う。武蔵野市はコミュニティ政策に取り組んできていたが、時代が経つ中で孤立する人も出てくることは避けられない。ただ、そのような場合も市民は対応するはずで、新しい取組が立ち上がると思う。その際、学び続けるということが求められると思うのだが、そうであれば公的な生涯学習施策に何ができるのかを考えるべきだろう。
- 委員 資料2の15頁の「F生涯学習と地域活動が結びついていない」について、地域活動は学びの結果なのだと思う。学び続けるということは学びが深まるということで、批判的な思考が伴うと思う。他者との関わりの中で批判的な思考が生まれると思うのだが、武蔵野市が目指す生涯学習は他人と関わることを伴うのだと思う。だから、学びを続けるためには社会に関わり続けることになるのだと思う。
- 委員 生涯学習計画の検討をしているところだが、行政としてはどのような方向

性を考えているのか。できれば事務局が考え方を示してもらい、その大きな方向性に沿って考えるべきなのではないか。

委員長
事務局
委員長
委員
委員長
委員
事務局
委員長
委員
委員長
副委員長

この委員会で検討すればよいと認識しているが、事務局はいかがか。
そのように考えてもらってよい。
委員会での議論の経過を市長に報告すると聞いているが、その点はどのようにになっているのか。
議論が一定程度進めば、市長等に報告する予定である。そこで市長等から意見があれば委員会に伝えるが、現状は委員会で自由に議論いただきたい。
そのようなことなので自由に意見交換をしたい。
資料2の12頁の「C生涯学習に関連する市の施設が充実していること」が特色として挙げられているが、前回委員会で施設の立地が偏っているという意見があった。それについても考えていきたい。
また、基本方針1「学びをえらぶ・はじめる」の支援について、生涯学習においてもコンシェルジュ的な役割が必要に思う。学ぼうとしても何をどのように学んだらよいか分からない人もいると思うので、図書館でのレファレンスのような支援があってもよいと思う。
Cについては武蔵野市は施設面でも恵まれていると思う。施設整備に関する第4章で取り上げるとは思うが、他市に比べるとはるかに充実していると思う。
事務局に質問したいのだが、現行計画では重点施策が示されている。資料2では重点化するような部分は分からないが、新しい計画では重点施策を設けるのか。また、2頁の図表「計画における生涯学習の範囲」において社会教育という言葉が使われているのは気になる。普通名詞で説明するよりも、具体的に「社会において広く行われる学習」と書いた方がよいと思う。
重点施策が見えづらいのはその通りだと思う。重点化すべき点についても議論をいただき、そこから取り上げたいと思う。
2頁の図表は法律に基づいているが、記載については分かりやすく検討したい。
「社会教育」という単語は2頁に出てくる一度しか使われていないが、「社会教育」という用語が持つ意味がおろそかにされているのであろうか。
社会教育という言葉がなくす必要はないと思う。「社会教育主事がコーディネートする社会教育ではない」という意味で使うかぎり、社会教育の用語を無くすべきではないと思う。
自分は社会教育と生涯学習は両輪だと思っているが、それはまた議論したいと思う。
国における生涯学習の定義では、個人を強調している。社会教育はリバイバルしており、厚生労働省や国交省で着目されている。社会が変化する中

で地域社会を住民の力で立て直そうとする上で社会教育が見なおされている。ただ、武蔵野市はそれほど地域が傾いてはいないはずだ。だから、個人の生活を大事にしてよいと思う。その中で地域もよくするという考え方を持てればよいと思う。

学びのコンシェルジュという提案があったが、国はオーガナイザーが取り上げられている。言葉の微妙な違いだが、コンシェルジュという言葉には個人のニーズに応じて個人が学びを組織するという考え方が表れているのではないかと思う。

委員長 現在はあらゆる分野でボランティアがないと成立しないような社会になってきている。ボランティア社会というべき状況を考えるべきだと思う。

副委員長 自治と関わるテーマだと思うが、武蔵野市民は自らまちを担う力はあると思う。その力を持つ市民をどのように後押ししていくのかという考え方が大事だと思う。「市の各種事業の「生涯学習化」」がその対応だと思うが、自治と関連して生涯学習を考えていく必要があると思う。

委員 市民活動家という立場があるが、生涯学習との連携はあり得るのか。またどういった内容になるのか。社会福祉協議会のような組織との連携を整理することも必要なのではないか。そうしないと生涯学習という認識が広がらないと思う。生涯学習の普及を目指すには生涯学習を具体的に定義しないといけないと思う。

社会教育主事の仕事のように、小さなコミュニティで住民のニーズを聞いてファシリテーションするような存在が必要なのではないかと思う。そのような存在があれば、生涯学習の中から目的別コミュニティ活動が生まれるのではないだろうか。

委員長 資料2の1頁の定義をよく考えるべきなのだろう。

委員 個人を豊かにすることと社会を豊かにすることが2本立てになっているが、やはり個人が豊かになることで社会が豊かになると思う。

委員長 予定調和という言葉がある。個々がよく生きれば社会もよくなるという意見はあるが、ほんとうにそうなのかと思うところもある。

委員 心が豊かであれば社会はギスギスしない。経済面ではなく精神面での豊かさが大事だと思う。

副委員長 たとえば子どもが貧困から抜け出すのはお金よりも社会関係によるところだと思う。貧困である子どもは自己肯定感が低いが、社会に自分が位置づけられているという認識が持たれていないことが多いと分かっている。人間関係の貧しさがあ、り、そうであるからさらに言葉で表現することができず、社会の中で自分を位置づけられないようだ。経済的貧困とは異なる、そのような関係性の貧困から抜け出すためには学び続けるという力が必要なのではないかと思う。

委員長 この計画では、取り上げられていないが女性のためのシェルターや子ども

のためのシェルターが必要だと思う。武蔵野市には現在シェルターがないようだが、これからは、ますます必要になると思う。

委員 冒頭で触れた「本市を取り巻く環境の変化」を考える必要があると思うので、次回までに各自考えてくるということはいかがか。それが的確に捉えきれていないと計画が皮相的になり本質的なもの迫れないのではないか。最近ひきこもりが話題になっているが、武蔵野市では実態を調査したことはあるか。そのような実態も把握できるとよい。

事務局 ひきこもりの実態調査は行っていない。ひきこもりの青少年の支援は行っているが、まったく外出しない人たちの人数は把握できない。ただ、厚生労働省で全国調査は行っているので情報提供は行いたい。

委員 格差対策を生涯学習でカバーするという意見が多い印象だが、健康行動学では、個人の関心から始める人と他人との関わりから始める人もいる。もうひとつは何も始めない人なのだが、その人たちに対しては戦略的なアプローチが必要だと言われている。生涯学習を通じたひきこもりの支援も同様に戦略が必要だと思う。

委員 人と結びつくような組織という話があったが、ひきこもってしまった場合にはものづくりが有効だと言われている。コミュニケーションをする必要があると障壁になるが、ものづくりは個人でできることなのできっかけになる。

委員 学習機会を提供する立場に限って考えるのか、それとも広い範囲で考えるのか。自分たちで自立して活動している人たちの活動も取り入れるのはよいが、拡散するのではないかと懸念される。教育長からは範疇を狭くするというような意見も出されたが、そのようなことも考えた方がよいのではないか。

3. 事務局からの連絡

事務局より次回委員会を、7月11日（木）17時30分より吉祥寺図書館にて開催することが連絡された。

以上